

歴史を生かした、まちづくり

～ 集客都市『大阪』を考える ～

奈良大学名誉教授

水 野 正 好 氏



略歴▶▶▶

1934年大阪市生まれ。大阪学芸大学卒業後、滋賀県・大阪府・文化庁で文化財行政を担当。1979年より奈良大学教授、文学部長、学長を経て2005年より現職。現在、(財)大阪府文化財センター理事長、日本文化財科学会会長などを兼務。主な著書に「島国の原像」(角川書店)、「日本の原始美術・土偶」(講談社)、「古代を考える・河内飛鳥」(吉川弘文館)等がある。

1. 古代の大阪湾—ナウマン象の化石の発見から分かったこと

今日は、大阪が日本にあって古代からいかに重要な地域を形成し、息づいてきたかということについてお話を申し上げ、皆さんのまちづくりのヒントになればと願っております。

まず、最初に大事なお話をします。大阪の岬町に、宝樹寺という寺があります。南海電鉄の「みさき公園」のすぐそばの寺です。この宝樹寺の和尚さんは非常に大事なお仕事をなさってくださいました。海底で網を引きますと、いろいろな陶磁器が海揚げりするというようなことがありました。こうした海揚げりの品々を和尚さんは、皿などは経1尺なら酒1本、2尺なら2本というように交換されて収集されました。

そういうことで、見事な壺や皿が数百点集まりました。こうした陶器は、中国の見事な焼き物で、中国で積み海を渡り瀬戸内海をへて堺港へその荷を着けるつもりなのでしょう

が、大抵の場合は和歌山港へたち寄り、それから堺港の空き具合を見て入港することになります。その途中で難破した船があり、その荷がこのような海揚げりするということなのです。やがてこうした品々が海揚げりしなくなりました。というのは、大阪湾の海底の潮流が変わり埋まったのでしょうが、しばらくすると今度はこの場所に打たれた網が破れ始めました。網が破れるというのは、重いものがかかるということです。漁師の方々は、対応に強い糸の網に替えました。そうしますと、次々と面白い形の石が揚げり始めました。和尚さんはどんどん集められて、この石もまた二百点近くになりました。その石は断面が丸くて細長い石ですから、1尺ならば酒1本、また、2尺ならば酒2本と決め集められたのです。

そこへ、当時、京都大学の先生であられた亀井節夫先生、前の徳島県立博物館の館長先生ですが、噂を聞きつけて宝樹寺へおこしに

なられて、この石を見られました。そうすると、石はナウマン象の牙が化石化しているものであるということが分かりました。ナウマン象の牙が海底にたくさん沈んでいるということです。それだけではなくて、ナウマン象の湯たんぽのような形をした歯も採集されていることが判りました。ナウマン像とは別に、端から端まで2 mにもなるオオツノジカの角も海揚げしていることが判りました。

先生はこうした化石が埋っている海底はナウマン象やオオツノ鹿の墓場ではないかと考えられました。先生は海中ということで調査できないことを非常に残念がられていましたが、やがて亀井先生たちは長野市の隣の信濃町にあります野尻湖（のじりこ）で同様なナウマン像・オオツノ鹿の大規模な墓を発見されます。泊まれた旅館の木の間に大きな化石の牙が飾られていました。それはナウマン象の牙の化石でした。旅館の方に問いますと、旅館の裏にある野尻湖の汀から拾ったこと、町の中にまだ何人か同じような化石を持っている人がいることがわかったのです。それぞれの方をたずねましたら、たしかにナウマン像の化石でした。素晴らしい、この湖畔なら発掘できるということになりました。

古生物学者の先生方に、考古学者も加わり、市民等も参加する大がかりな調査組織がつけられ、調査がはじまりました。まず注目されたのは象の足跡です。象は体重があるので泥地では集体が沈みます。その足跡の穴に砂が流れ込むのです。すると黒い泥土の表面に砂の入った灰色の輪郭ができます。その砂を丁寧に除き、そこへ圧をかけた水をあてますと、途端に砂が散ります。その穴へ石膏を流しこ

みますと、見事な足跡が取れるのです。結果、ナウマン象は足の先まで毛が生えている事実や爪の形もわかってきます。子象から親象に至る過程が足跡も判ります。

こうした象の足跡の研究だけでも素晴らしいのですが、それだけではなくて、さらにその背後に人間がいて、人間の足跡が残されていることが分かってきました。象と人間のかかわりが分かってきたのです。

型どりされた人間の足跡は、今日の私たちの足跡とは大きく違います。私達の足は、人類史上最も退化した形になっています。もう私達は素足であちこちを歩くことは到底できません。舗装道路の上でさえも歩けないと思います。小石や粒石をふんでは「痛い、痛い」と言うに決まっています。今日履く靴や靴下が大きな影響を与えてるのです。私たちの足の小指は内へ曲がり易くなっています。私の年になりますと、爪は1 mm ~ 1 mm半ぐらいの分厚いゆがんだ小指の爪になってしまいます。ところが、当時の人の足指は、親指と同じように小指が独立宣言するかのように開いており、爪は分厚くありません。発掘で分かってくる足跡は、「土踏まず」が非常に深く、どこでも歩き回れる、はだしの生活にいちばんふさわしい足の形をもっているということが判ってきたのです。

皆さん、私たちが人類史上最も進んでいるとは思わないでください。長い人類史上我々がいちばん弱い形の人類になってます。襲われたら、最初に倒れていくのは我々です。古代人のほうがはるかに強く抵抗できるということです。

また、この野尻湖では象を倒すためにいる

いろな道具が作られていることが分かってきました。鋭い石の刃をつけたナイフで象の皮を切り、解体して、中の内臓や肉を取り、皮をはぎ、肉を食べます。肉は「蒸し焼き」にします。径3 m程の浅い穴が掘られて、その中にたくさんの焼けた石を入れ、ここに葉に包んだ肉を入れて、蒸し焼きにする調理法です。象は大きいですから、肉の量は多く、たくさんの人がしばらく食べていけるわけです。しかも、象は集団で行動しますから、象と共に歩けば、常に「食」が保証されるわけです。人々は象と共に歩み、象を狩り生活していたのです。

野尻湖の調査ではいろいろ話題が生まれました。野尻湖は信州の湖です。高地の湖です。ところが一方では、瀬戸内海の海底、岬町の沖合い「アエノディ」でも象の骨が出てくるわけです。その場所は水深48mもある深い海底ですから、どう考えればよいのかという問題が生まれてくるのです。海底の象の墓場はどうして生まれたのだろう。

「象は海を泳げないし、海の中を歩くこともできないのに何故海底に象の墓場が誕生するのだろうか」と問題になるわけです。

地球温暖化や地球寒冷化に対して大きな答えを出してくださったのは、日本の南極越冬隊です。赤道直下では海面が2万年ほど前には300m近く下がっていて、日本近海では130mほどが下がっていたということを明らかにされたのです。岬町地方の海底、アエノディは水深48m、そこに象の骨がたくさんみられるのですから、それらの象が瀬戸内海の海底を歩ける時期があったのではないかと考えられたのです。2万年ほど前には日本で130m

ほど下がっていたということが判ると、なるほどということになります。

聞き込みききこみ調査をしていたら、瀬戸内海沿岸の漁師のかたがたが、たくさんのナウマン象の化石を持っておられるということが分かり始めました。そこで、その方々をたずね、その方の漁場を海図の上に記入しながらナウマン象の位置や数を記入していきましたら、1 kmほどの間隔をおく2本の線になることが分かりました。2本の線の間が昔の川のあと、川の両側が象の歩く道であったわけです。1 kmの川幅をもつ「旧瀬戸川」があるということが分かったのです。岡山・坂出間につけられた本四架橋は、いま橋脚をたてていますが、古くは島ではなく香川県の坂出へ行く山脈だったわけです。瀬戸内海の中央を東西に区切る形で走り、流れる水は東へと流れて「旧瀬戸川」なり、西へ流れては、「旧豊後川」になっていることが分かってきたのです。

私たちが想像もできなかった「瀬戸内海に海水がなかった時代」、東へ流れるのが旧瀬戸川、西に流れるのが旧豊後川、その縁を歩く象がいたというわけです。ナウマン像は中国から日本へきます。その時期は寒冷な時代で南極と北極に海水が吸い寄せられて、海面が大きく下がり、神戸や岡山から徳島・香川へは歩いていけたのです。

南から日本にやってきたナウマン象は九州から本州へ、さらに北海道へ行くことができたのです。何しろ、海面が130mまで下がります。2万年ほど前の日本は、コーヒーカップの取っ手のように、アジア大陸にとりつく日本弧をつくっていたのです。北からはマン

モス象が下りてくる、南からはナウマン象が上がってくるという状況でした。コーヒーカップの取っ手のようにアジア大陸につながる日本の姿、考えただけでも興味深いですね。

いま私たちが追求しているのは、マンモス象はどこまで南下したのか、ナウマン象はどこまで北上したのかという問題です。マンモスは、シベリアから下りてきて樺太、そして北海道の北端まで、今日では骨が見付かっています。ナウマン象は、南からずっと上がり北海道の南端まで往っています。北海道のどこかで両象が会い、「おれはナウマンだ、おまえはマンモスか」と話し、それぞれの象の後についている人も、多分「おれはナウマンと一緒に来た」「おれはマンモスと一緒に来た」と、言い合いしているように思います。

このような時代は、従前は我々の頭にはない、想像もできない世界だったのですが、やがて大きな変化の時代がきます。現在、日本は急激に温暖化しつつあります。この温暖化現象がちょうど1万2,000年前にはっきりした姿をとるようになります。次第に暖かくなり南極・北極の氷山や氷原が太陽の高い気温で融け始めたのです。海面がどんどん上がり瀬戸内に海水が入りこんできます。本州・四国・九州・北海道・樺太といった島になり、やがて中国やシベリアから象と共にやってくる人たちが海にさえぎられて来られなくなるのです。もちろん、マンモス象もナウマン象も来られません。しかも気候は暖かくなり象自体が日本では絶滅していくのです。

2．古代日本人の道具の発明

地球温暖化現象は、現在の大きな問題ですが、1万2,000年前に日本に住んでいた人々にとっても問題、いろいろ大きな試練にさらされます。ナウマン象もマンモス象も島国になった日本には来れない。しかも、日本にいる象は、温暖化現象で自体が滅びつつあり、その後人が食べつくしていくことになります。そこで、将来はどうなるのかという問題に直面するわけです。このときの日本にいる人々は素晴らしい飛躍を果します。女性は「焼き物」を作り、男性は「弓矢」を作り始めるのです。これは非常に大事な動きです。ナウマン象は単純に倒しやすい動物ですが、代わりに登場してきたシカやイノシシはなかなか獲りにくい動物です。人間が追いかけても足が速いだけに捕まえるのは中々むずかしい。そこで「狩りする男性」が考え出したのが、飛び道具、—弓矢です。彼らは弓矢発明の直前には巾狭く長いさしわたしの「落し穴」を盛んに掘っています。「けもの道」に深い穴をつくりその中に先をとがらせた木—サカモギを直立させ、地上にいろいろなものを載せてカムフラージュするわけです。この「落し穴」にシカやイノシシが落ちるのを待つという手法だったようですが、あまり効率はよくなかったようです。東京都が多摩ニュータウンを造りましたときに、こうした落し穴をたくさん掘りましたが、あまり長続きしなかったようです。

ところが、飛び道具—弓矢の発明で、日本人は初めてイノシシやシカを取ることができるようになります。一方では、気候が暖かくなったものですからどんどん草木が繁り、果

実が実り、根茎も豊かになります。そうした植物をどのように調理するかを考えたのは女性です。生のままで食べられるものもありますが、煮炊きしなければならぬものもあります。この煮炊きのために初めて女性は「焼き物」を発明します。これが温暖化に伴う天候・環境の大きな転換期に、この日本列島に住む人の初めて執った行動です。

世界では7,000～8,000年前、「焼き物」や「弓矢」が生まれるとされています。大陸では海面の上昇で大きな影響を受けることは少なかったことでしょう。文明が発祥したといわれているエジプト、インド、中国では、7,000～8,000年前に初めて弓矢や焼き物が発明されると言われています。ところが日本は、世界中から不思議がられることですが、1万2,000年前に「弓矢」と「焼き物」が発明されているのです。日本人は強烈な危機をつよく受けて、島国化しましたから、対応が早いのです。海面の上昇は日本にとっては大変、全生活に強烈な影響を与えましたから、それまでとは大きく一変した風景の中で、対応に新しいものが創り出されていくのです。これは素晴らしいことです。

そういう意味で、今日の我々もよく似た状況の中にいるのですが、事態を深く考えず、自らは何も対応してはいません。当時の人は、放置すれば目前で食えない、妻も子供も自分も失うというわけですから、必死、その必死の中から生まれたものが弓矢と焼き物だったのです。

3．大阪湾の海面上昇

(1) 6,800年前の海岸

このように、海のなかった時代から海の上がり来る時代が来、やがては海が今日よりも大きく上がる時代がきます。25年ほど前のことですが、近畿日本鉄道(株)が生駒駅から築港駅まで新線をつくりました。この新線を引くとき、会社の方が「近鉄が新線を造るのですが、生駒山をトンネルで越えて大阪府へ出た地域にはたくさんの遺跡がある。大阪府教育委員会はそれらの遺跡を発掘した上で工事するようにと言っている。先生、何とか発掘してください」ということで来られたのですが、勿論このような大事業は一人で出来るわけではありませんから、東大阪市教育委員会に組織を作っていただいて、発掘して頂きました。そうすると意外な事実が浮かび上がりました。

生駒山をトンネルで抜けて大阪へ出、少し西へ行きますと、今日の地面より少し深いところに、3.5mから4m近い断崖が出現したのです。荒波にうたれて出来た断崖です。波のつよさから見て海地ではないかと思いました。発掘が進みますと、大きな骨がこの断崖の上から次々出てきました。自然史博物館へ、この骨を持参したところ「これはすごい、マッコウクジラの骨だ」と教えてくださいました。東大阪市の石切剣箭神社から300m程西へ行ったところに海辺の崖があり、マッコウクジラがその海で泳いでいた事実が浮かび上がってきたのです。そのマッコウクジラを捕獲して食べた結果、たくさんの骨が出てくるというわけです。調理した跡もありましたし、煮焚きする焼き物や木炭も出てきました。この木炭から私たちは、6,800年前の木炭と

いう年代値を得ました。

6,800年前、海は現在よりもはるかに高く上昇していたことになります。海面の上昇で中河内に大きな海ができていたことが判りました。その海は南は八尾市から北は高槻市・茨木市に届く大きな湖です。大阪市内の西区や此花区などの地域、環状線の東側、東大阪市や守口市は広々とした海になっていたのです。大阪城や大阪府庁があります丘陵—上町台地は岬となって南から北へ長くのびていたことが判ります。今日の皆さんには想像ができない風景です。

（２）地球温暖化の影響

我々は100年間以上生きることはいけません。よく生きて100年、短ければ50～60年。その中で見る景色は地球史のほんの一部分なのです。しかし、ほんの一部分とはいうものの、今、私たちはまさに危機の時代を迎えているのです。地球温暖化現象がそれです。地球の温暖化で、今、海はお話ししました時代と同様に海面が上がりつつあるということが問題なのです。現在年間8mm前後、毎年海面が上昇しています。10年で8cm、100年で80cmになります。このように、どんどん海面が上がってくるということなのです。

新空港を造りますとき岸知事が環境温暖化に関係する委員会を立ち上げられました。私も委員の一員で、各委員は「できたらいいでしょうね」「大阪は大発展ですね」と言いました。私は一言だけ、「きちんと海面の上昇に配慮していますか」と知事に聞きました。知事が「海が上がるとはどういうことですか」と言われましたので、「地球の温暖化で

海面がこれからどんどん上昇します。海面上どれ位の高さの所に空港の滑走面を造るのですか。もし低ければ遅からず浸水しますよ」と申しますと「1.2mぐらいと聞いているが」と言われました。私は「年間8mmの上昇ですから100年はもっても200年はもちませんね」とお伝えしました。知事はびっくりされて、早々調査を命じられたようです。その結果、海面より3.4m高の滑走路が設計されることになったのです。

最近では、海水の塩分が堺市をはじめ、大阪湾全域を侵し始めています。お茶をたてられる方々が、水が固くなった、おいしくないと話しておられます。井戸水に塩分が入り始めているからです。塩分の生活への影響問題が間もなく表に出てきます。鉄筋の建物は、まず鉄筋が塩分でやられます。大きな被害が間もなく大阪市内で一斉に発生することは間違いありません。

地球の温暖化現象というのは遠い先のことではないのです。私たち考古学者は、遺跡の発掘調査を通してこういう大きな変化を目の前で見えていますから、申し上げられるのです。皆さんとともにその対策を考える、という責任もありますから、常々このお話をしています。

4．貨幣の始まりと経済の中核・大阪

6,800年前、大阪湾は上町台地の下までせまり、東側には中河内、北河内郡に広がる大きな中海があったわけです。今日私たちは、この海を「河内の海」と呼んでいます。しかし、この海は、現在全く姿をとどめていません。江戸時代、鴻池新田の位置にあった深野

池が埋め立てられ、ついに「河内の海」はなくなりました。

「河内の海」をめぐって興味深い事実が判ってきました。実はこの海が、極めて良港をはぐくんでいたことです。上町台地が風をさえぎってくれますので、東側にあります「河内の海」は比較的静かな海です。ですから、この海に流れこんでくる川の河口と入海になっております地が、なかなかよい港になるのです。その港の地名として、今でも例えば「深江」や「菱江」・「若江」というように「江」のつく土地があります。このように、江や津や浦という地名が「河内の海」の縁辺に取り巻くようにあることが分かります。この港々は、船を着ける非常に大事な場所で、中国・朝鮮半島や日本各地から大阪・奈良へとやってくる船が、船を大阪湾岸に着けるのではなくて、「河内の海」に着けるようになっていたということを物語っているのです。何といいましても、波の静かなよい海であり、そして、大和川は今では堺に流れていますが、これは江戸時代に堺の海へ人工的に流した結果であり、それ以前は大和川は奈良県を離れて大阪、柏原市に入りますと、大坂城のほうへ向いて幾條にも分かれて北流していたのです。また、羽曳野市や藤井寺・松原市からは、東除川や西除川といった川々がこの「河内の海」に流入していました。したがって、各方面から集まってくる船は、「河内の海」の港に船を着けたわけです。もちろん、中国や朝鮮半島からやってくる船も、皆、「河内の海」着けたわけです。結果、「河内の海」からは続々と中国や朝鮮半島の文物が見出されることになるのです。

一例を挙げますと、1世紀初めの「貨泉」という中国の貨幣が出てきます。この貨幣は従前、奈良県・大阪府でも出ておらず、九州では福岡から対馬までの間に8枚出ていました。九州の学者たちは「大阪や奈良は田舎、中国や朝鮮半島の船は福岡まで来て、それで帰っていくんだな」と考えておられました。私が「そんなはずはない。大和、河内は素晴らしい所で、将来出てくるはずだ」と言うと、九州勢は、「水野さんは大阪の人だからそう思っているんだ」とか、「奈良大学の教員だから、奈良でもと言うんだ」と盛んに言われました。しかし、早い話が、この「河内の海」の中央を南北に近畿自動車道が造られることになりました。日本道路公団と話し合い、100m近い幅で12.8km、深さ12mから18mを発掘しました。

その結果、河内平野がどのように誕生したか、洪水や土砂の堆積で「河内の海」が次第に狭まり、ついに河内平野になる経過が判かりました。「河内の海」の断面図ができたのです。この発掘が始まります時、私は調査担当の技師の人たちに、「貨泉」を探してほしいと要望しました。皆笑っていました。ところがありがたいことに、数日すると、水道施設の移設工事があり、その下を掘りましたら、深さ4mぐらいの層の中からその「貨泉」が見つかったのです。初めて見付けたわけですから、実にうれしかった。そこで、すぐ九州の友達に電話し、「今後どんどん見つかるぞ」と伝えました。この発掘調査は10年かかって終わりましたが、最終的には「貨泉」は12枚見つかりました。そのときに九州でも12枚になっていました。まさに12対12、不景気

で深い発掘のない大阪は、現在は負けておりますが心配はありません。その後、さすがに九州勢は中国・朝鮮半島の船が、大阪までは行かなかったということは言わなくなりましたし、むしろ、大阪のほうが中核であったということがはっきりしてきたわけです。

面白いことに、大阪への航路の途中に当たる山口県の防府市では海中から「壺」が揚がり、その中にたくさんの「貨泉」が収められていました。岡山市では、この貨泉25枚が、また愛媛県の松山市から、兵庫県の姫路からも見つかりました。滋賀県の長浜市ではより古い「五銖」という貨幣が出ました。外国船が確実に九州をへて瀬戸内海沿いに、近畿一円へ来ていたことがはっきりしたわけです。こちらへ来る途中、帰る途中で使用したり落としたりしているわけですから、近畿地方では貨幣経済がちょうど1世紀ごろには始まっていたことが判ったのです。

このように見てきますと、「河内の海」が物資の集散する中枢であることが分かります。貨泉はまだ名古屋や関東では見付けられていませんが、大阪を中心として船がそちらにも出かけていると思います。大阪は素晴らしい所、外国の船の寄りつく中枢、その奥に大和があるということが分かってきたのです。

このころのことを中国の史書『三国志』が詳しく書いてくれています。『魏志倭人伝』がそれです。当時の日本は「倭」と呼ばれ倭国王が国を治め、都は「邪馬台＝ヤマト＝大和」にあったと記されています。国王の都は大和の中の大和、天理市付近にあったと私は説いています。大和が日本の中核、河内はその大和に出入りする重要な港を連ねる大切な

ところであったわけです。

5．神功皇后と対朝鮮半島外交

大阪の藤井寺市にあります大きな古墳—津堂城山古墳で、見事な石棺が掘り出されました。私は仲哀天皇の古墳であり石棺であると説いています。この天皇とその皇后、神功皇后が大阪に大きな光を当てていく最初の人物になったと考えています。

天皇が和歌山に出、皇后が若狭にいたとき、南九州で反乱が起き、天皇はそれを鎮圧しようと軍勢をととのえます。天皇は瀬戸内海沿岸の港に繫留してある船に、皇后は日本海沿岸の港に繫留している船に軍勢をのせて下関市の北、大津—豊浦という港に集合させます。50,000人の軍勢といいつたえています。

天皇は、全員揃ったところで福岡に移り、南進するべく神に報告し、その助勢を得ようとしします。神を招き、その神託をきこうとしますが、皇后によりついた神は意外なことに南九州は自然と思い通りになる、それよりも朝鮮半島の「新羅」を討てと告げます。

信じられない天皇は、神の言葉を聞き入れず生半可に対処したものですから怒った神に命を取られて亡くなります。その神は「住吉の神」です。そこで、神功皇后は再度神に確かめると、同じ言葉でした。皇后は男装し「新羅国」に不意に攻め込み、大勝したと『日本書紀』に書かれています。

以後、新羅王から毎年80隻の貢物が贈られることになったとも書かれています。この記事を信じる学者もいれば、信じない学者もいます。ただ興味深いことに、この時代から日本に大きな変化が起きるとことは事実です。

このころ朝鮮半島や中国の文物がたくさん日本に入ってきます。江上波夫先生（元東京大学東洋文化研究所所長）は「騎馬民族」が日本を征服し、天皇家をつくったという説を出されたのですが、それは違います。そうではなくて、「新羅国」に攻め込んだということが日本に大きな変化をもたらすものになったとみるべきです。新羅国には日本にはいない技術者がたくさんいました。例えば鉱山開発と錬金技術者、銅や鉄を加工する鑄造鍛冶技術者、新羅独特の音楽—わけても笛に巧みな楽人、見事な錦を織る技術者、そうしたいろいろな分野の人たちが日本に連れてこられたり、自らの意思で来る、そうした動きが生まれたのです。日本に急激にそういう新しい文化導入の浪が始まったのです。

明治維新の時とよく似た現象で、外国の技術者を迎えて、西洋文化が一斉に流れ込み日本中に浸透したように、この時期に朝鮮半島や中国の文化が日本に一斉に流れ込んだのです。その際の最も大きな役割を果たしたのが大阪だったのです。

6．難波大隅宮への遷都

夫である仲哀天皇を失った神功皇后は新羅の国との戦いに勝って帰国すると、亡き天皇を河内に葬ります。その場所が藤井寺市にあります。津堂城山古墳がそれなのです。皇后の生み出した皇子は幼いものですから彼女が自ら摂政として政治を執り、葛城氏出身の武内宿禰が皇后を助けます。そして、皇子が成去しますと即位させた応神天皇にバトンタッチされます。

この応神天皇は、まず、都を大阪—上町台

地に移します。それまでの都は長く大和にありました。その都を応神天皇は初めて上町台地に移されたわけです。都の名は「難波大隅宮」といいます。その宮跡はまだ見付けられておりません。しかし、その所在地にはヒントがあります。

「難波大隅宮」といいますが「大隅」という地名は残っていません。しかし、「難波」は、上町台地とその両側の海辺をさして呼ぶ言葉です。応神天皇には神功皇后がおられるのですが、当時の慣習として何人もの妃がおられます。天皇は賢明で美人の誇り高い女性が宮崎県にいたとき、その女性を都へ呼ぶことにしました。皇后のことも考えて、身近かに置かず少し離れた地—桑津という地に住ませました。桑津は、阿倍野の東南方に近接する地です。その桑津へ天皇が通われるとすれば、天皇は政務を終えて暗くなり始めるころ彼女のもとに行き、朝方には帰ります。ですから余り遠いはずはない。それならば四天王寺の東側に大隅宮があったのではないかと私は説いています。

7．古代の国道

応神天皇が初めて上町台地に都を造られると、つづいて着手されたのは、たくさんの道です。まず都から南へと伸びる大道を造ったと書かれています。その道は、今もありがたいことに「大道」という地名をところどころ残しています。住吉からちょうど河内松原の間に「大道」という地名が何ヶ所も残されているのです。

この「大道」の地を発掘調査したら、幅が24mもある広い一直線の道路で、左右に

側溝が掘られていることが判りました。土器からみて4世紀後半、まさに応神天皇の時にピッタリの道でした。

昔の天皇が造る道路は直線道路です。天皇が造り、通る道ですから、大という字をつけて「大道」と呼ばれているのです。これが「難波の大道」です。

一方、天皇は併せて父—仲哀天皇を殺した住吉大神を現在の住吉大社にまつります。住吉大神は、本来は航海の神です。船を守り海路を守る最も大事な神でしたから、初め下関に、そして神戸に、そして最後に大阪へ移され、今日の住吉大社に祭られているのです。この住吉大社からまっすぐ、難波の道に対して直角に東へのびる道が造られております。

「磯齒津道」と呼ばれる大道です。

当時、堺港は「大津」と呼ばれていました。大津は他の港より大きいという意味だけではなく、天皇がつくり天皇が用いるという意味です。この大津からまっすぐ東へ延びる大道があります。「大津道」と呼ばれ、まっすぐに大和へ通ります。

さらにこの堺大津から斜め南に下りまして、そして東へ東へと行きます「丹比道」と呼ばれる大道が、羽曳野市を通りぬけて大和へ行く大道です。

このような幅24mという、壮大な広い道が応神天皇の時代に一斉に造られるわけです。この工事のほとんどが応神天皇の仕事です。このような直線の大道は、今日ではつくることができません。人間も少なく、機械もない、全て人力でという時代に行なわれた大工事なのです。

また、生駒山の西麓には「東高野街道」が

南北に走りますが、この道はこれらの大道よりも古くからあったと思いますが、これもこの応神天皇の時代に巾をひろげ整備されている可能性があります。このほか、四天王寺の少し南から東、生駒山へのびる道もあります。とにかく大規模な工事が一斉に進展していたのです。

8．応神天皇の大阪湾岸開発計画

このような膨大な人力を要する大道を造り上げていく、都をつくるというのが、応神天皇の大きな仕事でした。それだけではありません。このときに同時に開かれたのが、それまで乏しかった大阪湾岸に沿う港です。上町台地の北端には「難波津」があります。今日の天満橋から北浜にわたってひらかれた津が難波津と呼ばれていました。「難波津に咲くやこの花」といいますが、此花という名前があって、難波津はその辺にあると思う人がありますが、これは間違いです。難波津は今の天満橋から北浜の辺りです。

この難波津からずっと大阪湾に沿って、和歌山港までの間の港を一生懸命整備したのが、この応神天皇です。それまでも例えば堺港や和泉港がありましたが、それらの港をもくみこんで国家が経営する大掛かりな港津網が生まれていくのです。「河内の海」の南にありました芳江・深江・菱江・日下江などの港も整えながら湾岸沿いの大阪湾に大津を整備しはじめたのは、応神天皇のときなのです。

一例をとあげますと、四天王寺から真西、上町台地を下ると新世界、今宮戎があり大国町となります。その大国町付近の地名は「敷津」です。今でも敷津町という名前があり、

今宮高等学校があります。このように、たくさんの港が上町台地の西側に並んでおり、一斉に港を開いていたのです。

では、こうした港はどのように造られるのかが問題です。皆さんもよくご存じのとおり、大阪湾は比較的遠浅ですが、海底は浜に沿い3段・4段に凸凹になっています。

そのため難波津に船を入れようとしても、出入り口が分かりづらいわけです。入りにくいのに港を造るというのはどういうことかといいますと、海中の3段・4段の凸凹部の凸部の1画をけずり、そこを通り路として浜の港に船を通させ、そのために切り通し箇所到大阪市の市章になっている「みをつくし」を立てて航路を明示し、船を誘導する形をとるのです。「みをつくし」を見ながら船を住吉の港に入れるということになるのです。

この場合、海中の段の切り通しを削りを船の入口部を一段ずつ設けるという大きな仕事と、何十隻という船が出入りできる港を造る、そういう事業に取り組むとともに「大道づくり」を関連づけて工事にいくわけですから、大変な事業です。こうした事業をすすめていく応神天皇の時代の大阪は砂ぼこり、膨大な人々が働く「人いきれ」が横溢した時代といえます。応神天皇の大事業の成果を我々は今なお継承して、難波津、あるいは住吉の港があるわけです。私達はそうした過去の歴史を無視してたくさんの港を埋め立て、港の機能を殺してしまっていますし、大道も最近の道路や市街地化で次第に失われつつあります。埋立てで港を前へ前へ出しました。私たちは、いまそのツケで遺跡を失い財政難を招いているという訳です。こうした港は難波津から和

歌山の紀伊津を正面とし、西は赤穂市から尼崎、南は白浜津までを脇とする広汎な港津網がつくられていったのです。

これだけでもすごいと思いますが、それだけではありません。応神天皇は自分の墓を、羽曳野市につくっています。膨大な量の土量を取り上げ、墓石を運び蒼々と造り上げたものです。土量の最も多い古墳は応神天皇陵とされています。

9. 天皇陵造成にかかる人数と期間

天皇陵の中で土量の最も多いのは、応神天皇陵ですが、面積の最も多いのは、堺市にある仁徳天皇陵です。大林組が仁徳天皇陵を造る工事に要した人数を計算してくれました。機械ではなく手で造る手法で、1日2,000人も働いて、土曜日は半日、日曜日は休み、正月休み、盆休みなどの休日をのぞくことにして、15年8か月を要するという結果をだしました。15年8か月の総動員人数は、680万人になるといいます。

残念なことに、この計算には3重目の堀と堤が計算外になっていますから、この分を加えると750万人になるかもしれません。

ところが、応神天皇陵は、この仁徳天皇陵よりも盛土量が多いとされています。言葉を返しますと、応神天皇は、大阪湾岸にたくさんの港、大阪湾岸からの大和に至る大道、都から南下する大道、それに都を造っています。その上にこの陵墓も造り上げているのです。

そう考えますと、上町台地を中心に膨大な人数がここで堂々と働いているということがわかります。全国各地から人々が大阪に呼び出されている訳です。大阪の地元の人はその

使役される人々の食料を得るために農業にいきそんでいるわけです。このときの大阪はすごかったと思います。とにかく日本の中の最重要開発地域で、ここに応神天皇の想いのすべてがかかっていたと言ってよいだろうと思います。彼はそれほどまでに大阪という所に入れ揚げているのです。

10．仁徳天皇の都づくり

応神天皇のあとをついだ仁徳天皇は、天皇になると大変なことに気づきました。彼が高殿に昇り周囲を見渡しますと、民のカマドから煙が上がっていないことに気づきます。気づいていても皇太子では天皇に言えなかったのかも知れません。彼はこの情景を見て、改めてこの事態は大変なことだと思いました。そこで応神天皇の仕事に思い切りナタを入れます。まず工事はとり止め、税や貢進を一旦3年止めます。そして、新しい都も造らず辛抱します。さらに3年つづけ6年後になりますとそうした政策が功を奏して、国民の方から都をつくらせて欲しいという声がかかるようになったといえます。

仁徳天皇の皇后になりましたのは、葛城氏出身の磐之媛です。皇后になり、天皇と共に日本最高の位についた彼女にしてみれば、どうして私たちの新居ができないのか、なぜ耐えしのばなければならないのか、不満がたまります。しかし、天皇は免税政策を変えず都の建設も中止してきました。そして6年、いよいよ王室の建設から、天皇の新規事業が始まり出しますと大変な不幸がまちうけていました。

仁徳天皇の新規事業は、父の路線を踏襲す

ることから始まります。この踏襲はすさまじいものです。堺に100基ほどの古墳があります。その中核は仁徳天皇陵です。続々と周囲に古墳がつくられていきます。そしてさらに彼は、「難波高津宮」を造ります。高津は港の名です。上本町6丁目の西側に高津神社、東側に高津高等学校があります。また『日本書紀』には小橋を架けたと記されています。今も上本町駅と鶴橋駅の間、北側に「小橋」の地名があります。これらの地名の比定地についてはいろいろ意見がありますが、今日の上本町6丁目付近にこの都があったことは動かないと思います。

応神天皇の都の北側に造られているのです。父の仕事を継承し6～7年間の中断をおいて、やがて長い人生を全てこの事業にかけて、素晴らしい大きな大阪の湾岸計画を完成させていくのです。

天皇の仕事が、今、どのような姿で残っているのかといえますと、上本町6丁目の東に日赤病院があります。その西側を通る南北の道は堺までずっと延びていきます。応神天皇の「大隅宮」から南にのびる「大道」が北へ整備されているのです。現在でもこの道がそのまま残されています。

11．鉄の導入

このような大きな都の開発を応神・仁徳両天皇が成し遂げたわけですが、この大事業の背景には、先ほどお話ししました神功皇后が新羅国から日本へ迎えたたくさんの技術者の存在であります。当時の日本は鉱山開発がおくれ、鉄・銅・鉛・錫も国内では採れませんでした。従って朝鮮半島から素材を輸入した

り、新羅の鉄山で日本人が採掘に励む姿があったと記されています。彼らの採った銅や鉛等は日本へ持ち帰られて、葛城山の山麓にあります忍海の村で「忍海漢人」たちが鍛冶に当たるのです。この人たちは武器や農具・工具を鍛え、兵器もつくりまします。そうした製品が、応神・仁徳天皇の時代の大土木・大改装開発事業の基盤になりますし、軍事の整備にも働きかけることになります。

たとえば、鍬や鋤は樫—カシの木でつくられていたのですが、耕しますと刃先の消耗が早いわけです。そこへ鉄の鍬先をつけましますと非常に効率よく仕事もはかどり、各種の土木工事が可能となるのです。単なる農耕の鍬・鋤ではなく、工事用にもあてられていくのです。当時の日本の最新技術の駆使による大事業です。今日でいうコンピューター技術に匹敵するような新しい技術・思想を豊かに生み出す、道から港、町から都に至るまで全てを生み出す、土地に新しい価値を生み出す、そうした強烈なエネルギーに鉄が大きな役割を果たしたのです。

12．発掘の障害

いま一つお話ししたいことがあります。仁徳天皇陵の少し南に、左藤義詮知事の時代、泉北ニュータウンが造られました。なぜこの地にニュータウンが生まれたのかと申しますと、大阪市内がどんどん発達するのに対し、堺市や和泉市では開発がおくれていました。同様に豊中市は発展していくが、吹田市はおくれ気味。ですから、大阪府は意図的に、両地にニュータウンを造り活力を与えたいというわけです。東京では多摩ニュータウンの開

発が始まっています。

堺市の丘陵地にはたくさんの古代陶器を焼いた窯跡がずらりと並んでいました。丘は林や森でしたから、私たちは踏査して1基、1基と見つけていき、その数100基ぐらいになりました。ところが、当時は開発が何よりも優先する時代、大阪府教育委員会から、窯跡があることを通知しても開発側は十分な調査をさせてくれません。私達も意地になって、破壊される現場で必死になって、発掘したり、ブルドーザーでこわれた窯跡の土や陶器をダンプカーに載せて、持ち帰る日がつづきました。どのような窯なのか、1つの窯で何回焼いているのか、いろいろ知りたかったのですが、ほとんど明らかにできないままに工事が進みました。日本最大の窯場、しかも仁徳天皇の時代に始まる窯跡が次第に姿を消しました。全部で窯はこの地域で800基程あったようですが、今日では100基程残っているにすぎません。文化をかえりみない荒い開発が吹田、泉南北地方に吹きわたったのです。

当時、私たちがユンボですくって持ち帰りました土器は、まだ今日でも洗っています。まだまだ泥をとる作業がつづいています。とにかくにも、ものすごい量です。やっと今年、この中の優れた陶器が重要文化財になりました。復元できた遺品はこれから皆さんに見て頂けると思います。

こうした陶器が誕生する前、日本でつくられていた焼き物は、低い温度で焼きました、赤茶色い、もろい焼き物です。間もなく表面に水がにじみでてくるような焼き物です。こうした焼き物は煮炊きにはいいのですが、食品や汁物の保存には適していません。ところ

が、仁徳天皇の時代、朝鮮半島から伝わった焼き物は灰色で堅く、すごくシャープな造形をもつ器です。さらに、きめの細かい土を用い、美しい櫛目の文様で飾られています。

仁徳天皇が朝鮮半島から陶人を呼んで、堺市で焼かせ始めたのです。この陶業は初め、堺市域だけで操業しています。仁徳天皇が自ら指揮して自らの政策として焼かせ、自分が日本各地に配っていく対象として作らせたのです。佐渡の金山博物館や新潟の南魚沼市（十日町）の飯綱考古博物館でもこの焼き物が陳列されています。私が、「これは大阪の陶邑、泉北ニュータウンで焼いたもの」と説明しますと「何故うちにこのようなものが出てくるのでしょうか。信じられません。ここは佐渡ですよ」と言われたのです。「仁徳天皇が大阪で、古墳や道、港や都を造るために、あなたの国からたくさんの人がよびよせられ働いているのです。その返礼にこうした陶器を送っているわけですよ。朝鮮半島の先進的焼き物を日本でつくり、和風・韓風の酒や食物、あるいは宴会のやり方、その器などを仁徳天皇は政策として遠方の地方へ配っているのです。だからこそ人が出せるのでしょう。人が集まるのは単に、天皇の権力が大きいだけではなくて、そういう見返りがあるからなんです」と答えます。「ああ、なるほど。そういうものですか。これと一緒に鉄の板も出しています」。とのお返事があるわけです。私は、「それは当たり前です。陶器と共に鉄も一生懸命、朝鮮半島からとり入れ、大和の鍛冶屋に鍬や鋤をつくらせるだけでなく、地方の国司たちにもこうした鉄の鍬や鋤をどんどん送って農業開発を進めていく、そうして収

獲の米を大和に税として納めさせるのだから、皆が互いに持ちつ持たれつ、中央が地方を考え、地方は中央へ、そういう大きな交流があったのですよ」という話をしたわけです。

「なるほど」と皆分かってくれました。

国民に大きな負担を担わせるにも拘らず天皇に「仁」と「徳」という言葉がつく理由は免税期間を設けたり、このような見返りがきちんと行われていたからだろうと思います。

一方、この時代、いま一つものすごい政策が起きています。大阪府の南部、阪南市から和歌山県の白浜市までの海岸には、うすい土器のかけらが山ほど落ちています。完全な形のものほとんどありませんが、底が尖り気味の小さな容器です。同じものが、徳島県や香川県の海岸にもずらっとあります。岡山、兵庫県にもみられます。最初は、この焼き物は瀬戸内海を往復する船が神々を祭ったのではないかと考えられていました。ところが、神戸女子大学の間壁葎子さんが研究されて、土器の底にナトリウムが付着していることに気づき、塩を焼いた土器だだろうと説かれました。海岸に大きな柱2本を立て梁をわらし、その梁に海草を下げて、海水をかける、そうすると、暑い日ですとどんどん水分が蒸発して、下に落ちてくる潮は濃くなります。その作業を繰り返しますと、濃い塩水になります。この塩水をこの土器に集め砂浜にさしたて、周囲で火を焚きますと水分が飛んで、壺の中に塩ができてくるわけです。このような塩づくりを仁徳天皇は各地でさせているのです。

こうした塩は九州の天草、福井県の若狭湾、石川県の能登半島、愛知県の知多半島でも作られています。関東では、茨城県でも作られ

ています。これが全部同じ時期に操業しているのです。たくさんの人を働かせるときには、塩がなければならないからです。

このように仁徳天皇の大規模開発を背景に、ものすごい勢いで塩が焼かれていきます。塩を焼くことで、煙公害・燃料の樹木伐採公害を生み出します。先ほどの陶器の窯跡薪木を切り使いますので公害を生みます。今日、中国の景德鎮では、年中「窯煙り公害」が声高に論議されています。古代の堺市の窯でも煙公害・伐採公害が発生していた可能性は大です。まして、海上にも塩焼く煙りがたなびきます。海上を広く漂う煙、海女の炊く塩煙りが海上の公害を生んでいくのです。

何せ、奈良時代では男性一人の税として、浜辺の村の人たちは塩を五斗焼き、それを朝廷に納めることが義務づけられていました。そういう塩を一斉に焼く煙がものすごい風景を生んでいるのです。

13．大阪湾岸の港を往来する船・船団

応神、仁徳天皇の時代のシンボルとなるのが、港を出入りする船です。当時の船は遣唐使船ほど立派ではありませんが、見事な船です。ただし、当時の航法は、必ず見える所から見える所へと進んでいく航法をとります。例えば朝鮮半島へ渡るとなれば唐津から、晴れて壱岐が見える日に壱岐へ渡る、また壱岐から対馬へは、対馬が見える日に出航すればいいのです。対馬からは木浦や金海という韓国の港が見える晴れた日に出航すればいいわけですから、難破しないで渡れるのです。

金海や木浦からは、朝鮮半島の西海岸をずっと同じように港から港へと岸づたいに行

きます。同様にして韓国から中国の今度は山東半島へ入って行くことができます。ですから、古代は割と安全に船で渡ることができたわけです。

ところが日本がいちばん怖れたことは、半島南半、その西部を占める「百済国」を失うことでした。中国に渡るにはこの国の協力が全面的に必要ですから、「百済国」が東側の「新羅国」に攻められますと支援の軍を出し、「新羅国」をうつのです。天智天皇の時代、百済国は「唐・新羅」軍との戦いに敗れ、国は滅びます。それ以来、日本は朝鮮半島を経由して中国へは行けなくなり、遣唐使は熊本県、あるいは鹿児島県から中国へ船を出します。太平洋は広いですから先が見えないので、大きな船を造って安全に行こうとするのですが天候にわざわざいされて、必ず4隻で出ていくのですが、1隻か2隻は往復の途中で沈んでしまうケースが多いのです。しかし、応神・仁徳天皇のころには、まだ島々を伝いながら行くことができる時代でした。

最近、三重県松阪市で堂々たる船形の埴輪がみつかりました。この船の前には立派な笠、中央を左右にわけて大きな盾が立てられ、その間、中心には帆が、反対側左側には大きな刀が立てられています。すばらしい具体的な表現を持つ船でした。盾や刀といった威嚇具や神聖を示す笠は魔をはらい、神々に祈りながら必死に海を渡っていく姿であるといえます。実に見事な船です。このように応神・仁徳天皇の時代、船は十分に発達しており、こういう船が大阪の「難波津」や和歌山の「紀津」から出発して行ったのです。

14．優秀な外国人の渡来

中国との交流には日本語ではだめですから、中国語を話し、書き、読む人、その文化を理解する人、加えて、船大工や地理を知る人、占星術や羅針盤を扱える人といったたくさんの技術者を必要とします。日本人を教育し役立たせることも必要ですから、応神・仁徳天皇は大阪に朝鮮半島や中国からいろいろな技術をもつ人をどんどん呼びこみます。

逆に言えば、中国や朝鮮半島の人々にしてみれば日本に来たほうがはるかに住みやすい一面があったと思います。戦いにあけくねする朝鮮半島では新羅・高句麗・百済の三国が互いに戦い、そこに日本が加わりますから四つどもえ。日本は再三、百済国を救援するというようなことがありましたから、「それでは日本へ行こうか」という人々がたくさんいました。トップに立つ人物が何万人という人を連れて来日するわけです。その人たちに対して日本政府は、例えば文字が上手に書ける、文章が書ける人には、文章の「文」という字をつけて、「文氏」という名前をつける。大阪の羽曳野市には近鉄の古市駅の東に、その文氏が配置されています。また、国外・国内から、難波津や大和川に至る船を管理し航行させる人には、渡来した手なれた人々に「船氏」という名を与え、この地域に配置しました。それだけではなく、田の面積計算が達者で収税の技能をもつ人々を藤井寺市に配置し葛井（ふじい）氏を称させています。計算・外交が卓越していた人々だったからです。

このようないろいろな特技を持つ人々を求めて、来日すると朝廷はそうした人々を河内や大和の至るところに配置しました。四天

王寺の東には「百済」という地域がありました。そこには百済国から来た、優れた人たちが置かれていました。第一、百済国王は弟や孫を日本に預け、百済から教師をおくりこみ、万一、百済国が滅びることがあれば、日本からそうした人物を送り帰してもらい、百済を再興させ百済王にさせようという対策をとっていたのです。

このことが現実になるのは、「白村江の戦い」のあとです。唐と新羅軍に挟まれ攻められた百済国は、天智天皇のときに滅びました。「白村江の戦い」です。日本は直ちに援軍を送ったのですが敗れます。敗れた日本はたくさんの「百済王家」の人、官僚を船に乗せ日本へ帰国しています。後には中国も日本に、捕まえた百済・日本人たちを送り返してきます。百済王室は枚方市中宮の百済寺付近に安住しましたが、やがてそれらの人たちは、求めて武蔵の国へ移ります。中国・朝鮮半島の高い文化が遙か大和とはなれた武蔵国で、都ぶりを発揮するのです。後の話ですが、和同開珎の鑄造や奈良東大寺の大仏の製作にあたって塗金用の金が取れると報じたのも日本に来た百済王家の人たちでした。日本の歴史には渡来してきた人たちの活躍が極めて大きいのです。



渡来した人たちは、多くの場合集中して住み、数多くの墓を作っています。一般的な日本人は基本的に墓を作らず、川へ流したり山の谷間に置くなどしていました。百済国や新羅国からきた人たちは、墓を作る慣行をもっていましたので各地に群集する墓が生まれてきます。例えば、柏原市にJRの高井田駅があります。少し山手に入ると、山の斜面に穴を穿った「横穴」と呼ばれる墓が約400基ずらりと並んでいます。その1基の壁の中には、まさに戦争に出征する戦士の姿がかかれています。船上で雄叫びする人たちが描かれています。

奈良の都から出てきて大和川を下って行く船団が、この高井田で北へ曲がり、桑津をへて難波津、そして難波の海へ出て行く、そういう重要な中継所でした。そうした重要な地にはたくさんの渡来の人たちがこの地にいて、港や外交施設で仕事する、そしてその人たちが亡くなると、ここに葬られているのです。

考えてみますと、我々は第二次世界大戦のあとも、日本人だけの力で日本を立ち上げたわけではありません。明治時代の文明開化—日本の近代化には、「お雇い外人」と呼ばれている外国の方々—技術者が大きな役割りを果たしています。確かに日本人の何倍という給料をもらいましたけれども、しかし、その人たちが日本に新しい西洋という世界を教えていくのです。何も見えないのに相手どうして話す「電話」などは日本人では考えつかないものです。こうした創造と受容は日本を大きく近代化へ舵をとらせました。私はそうした人たちを、「お雇い外人」といういささか侮蔑を含む名前で呼ぶのは、許せないと

の思いがあります。むしろ、こうした素晴らしい人たちを迎え入れた政府も偉かったと言わなければならないと思います。敬意を表さなければならぬと思います。

大事なことです。早い話が日本では江戸時代、貨幣は安定していました。「寛永通宝」は、美しい銭です。字が崩れているものはほとんどありません。徳川幕府はしっかりしていたので、文字を最後まで崩さなかったのです。貨幣の質を崩さないということは極めて大事なことです。常に同じ形、同じ重さのお金がきちっと出されています。

明治政府は開国と同時に、岩倉卿などを世界におくり出しました。彼らは先進諸国の貨幣が厳格な管理のもとに整然とつくられていくことを知りました。政府が最初に着手したことは「お雇い外人」と呼ばれる人たちを呼ぶことです。

ゴーランドという人がイギリスから招かれました。厳しい人でした。貨幣を1,000枚積み、その高さが違うと、「これはだめ」となり、もう一度作り直させるのです。そうした形で作業がすすむと日本の貨幣は、イギリスやアメリカに伍する貨幣になります。アジアの東端にある日本は、古来より高い文明を持ってはいましたが、以前は堂々と世界中に通用するお金はつくれなかったわけです。世界に伍して日本が出て行く上に、ゴーランドの強い姿勢が日本の貨幣を素晴らしいものにしたのです。世界で評判になり、高く評価されるようになります。それゆえに、日本経済が高く評価され日本のお金が世界各地で使えるお金となっていったわけです。

日本の発展には、外国人の力により端結が

ひらかれ、継承発展させるというケースがたくさん見られます。すばらしいのは、日本人はそうした人々の思想や技術をすぐに身につけ、その知性度の高さによって一層、発展させていくという力があるのです。

建物でも、外国の影響を大きく受けて発展します。最初、日本には自然に生み出された倉庫がありました。仁徳・履中天皇の時代には、紀伊津に100平方メートルある蔵が六棟も軒を接して並ぶというようなケースがありましたが、火事にあうと確実に全焼してしまいます。大きな蔵なのに火事への配慮は乏しいといわねばなりません。しかし、50年ののち雄略天皇の時代には大阪のNHKの位置に100㎡にわたる16棟の蔵が並んでつくられています。雄大な蔵です。2群2列に間隔をあけて見事に並んでいます。明らかに朝鮮半島や中国から来た人たちの指導があって、蔵は整然と右左2列、行をそろえて10棟、そしてさらにまた奥に右左そろえて6棟、計16棟を並べてるので、渡来した蔵氏を蔵の設計・管理者にして、蔵の維持管理にも宛てているのです。船民とも縁の深い「蔵氏」が係わり合っているのです。物品・出納から管理に至る全作業が中国や朝鮮半島から来た人たちの手をかりて始めたのですが、やがて彼らを蘇我氏—日本人が掌握するようになるのです。

したがって、応神・仁徳天皇の時代—5世紀初めの大阪の大きな技術革新は、外国の人々をたくさん迎え入れ、助けられながら、日本全体をレベルアップしていく、中国や朝鮮半島の新羅・高句麗に対抗しようという考え方がつよく打ち出されていました。つづく推古天皇の時代は、中国に対して、「日出づ

る処の天子、日没する処の天子に」というような言い方で、日本をはっきりと中国に対峙させようとする考え方が一種の国粹的なものかもしれませんが生まれてきます。そうした発想は、こういう外国の人たちを迎え入れたうえで生まれてくるものなのです。

15．歴史を生かしたまちづくりをするために

最後に申し上げますが、奈良市東大寺の大仏造建一つをとり上げましても、この背景にある統率者である國中連や行基菩薩は渡来の人ですし、開眼供養の盛儀の中心にあった菩薩僊那もインドのかたです。このように外国より渡来した人々が大事業の中心になります。日本人もこの事業を助け合って完成させています。新しい技術は彼らが持ち込み、日本ではそれを受け入れることによって、さらに発展させていく形を日本人は取ったのです。

このように見てきますと、非常に大事なことからして今日の大阪を見て、将来の大阪をどう発展させるのかと問われたときに、一つの回答が生まれると思います。まず最初に言いたいことは、外国の文化に対する尊敬の念を正しくもちながら、いい面を積極的に受け入れるべきだということです。積極的にそうした外国の文化を受け取らねばならないと思います。遅れると日本は小さな国ですから、次第に追いつけなくなってしまいます。

もう一点大事なことは、古くからあるものを大事にすることです。壊してしまうと過去の文化をうかがうことができなくなり、大阪はおしまいになります。壊したものは二度と返ってはきません。大阪には今なお、本当に

たくさんの明治時代から昭和初年までの建物が残されています。東京とはちがい、大阪は本当によく残されています。そうした大切なものが一企業の意味だけで壊されていくことは、考えてみると、50年、100年後には、「当時の人は惜しいことをしたな」ということになります。長い歴史を形作ってきたものは将来に残せば、より一層その歴史的価値がますのです。将来を考えない開発が日本には多すぎます。

幸い、中之島公会堂だけは今回の危機の中でも何とか回避されそうですが、あの公会堂でさえ今日の日本では、いつどうなるかわかりません。大切なことは、皆さんがいろいろな会議を開く際に、明治建築や大正建物を残すために、そうした建物で会議を開く、皆がそうすればその「会場借上費」でそれぞれの施設が維持していける可能性がでてくるわけです。思い切り皆さんが気を遣い合って、自分の足元にあるこうした施設を利用していただくことが、とりもなおさず日本にとって大事なことなのです。

今日の政府は、新しいものを受け入れることには積極的です。古いものを残すことにおいては非常に消極的です。最近、御堂筋も、今までの高さ制限を緩和しもう1・2階積み上げてよろしいと大阪市は決めました。そうしたら、途端に「そごう」が高くなりました。今度は「大丸」も負けじと、上げられるかもしれません。そうなりますと、またいつの日か上へ上げていこうということになります。日本はそういう国です。ヨーロッパへ行かれた日本人が何を見て感激されるかといいますと、「昔がそのままの形で残っていること」

に感激するわけです。よその国へ行って変化させない文化に感激して、帰ってくると日本ではどんどん変化させていく、そうした姿に対しては何とも思わない。これは日本人の一番おかしいところです。

非常に大事なことですが、歴史を大事にする、そうした思想・行動は、昔は文明の進んだ国が先進的にやってくれました。フランスやイギリス、エジプト、イタリアを含めて、開発途上国から数々の文化財を持ち帰り保管しています。当時は放置していれば消失する、今、保管しておかなければならないという気持ちで、持ち帰って保管するという形をとったのです。しかし、新しい国がどんどん力を自力で国家を維持できるようになりますと、その日から「返せ」という話になり、「略奪」行為と呼ばれるようになります。たしかに「返却」することもいいのですが、政情・国情をみるとやはり渡せないというわけです。返さないから略奪と言われているのです。こうした持ち帰った文化財を返してあげれば、「長い間預かっていただいてありがとう」ということになります。将来は、元の国に文化財を返す国は文明度の高い国であるとみなされるようになります。日本は今後そういうことができる国になっていくのかということが、非常に大事なポイントです。従来のようにお金を出せばいいだろうという考え方で外交するようではだめだろうということです。ODAなどの協力の仕方も大切な論点ですね。

大阪には、皆さんの足元に本当に沢山の文化財があります。文化財を大事にしながら、それをどう残し、どう活用し、将来につたえていくか、考えねばならないのです。文化財

を利用すれば「歴史を生かしたまちづくり」ができます。具体的な事例はたくさんあります。「堺灯台」をどう修理し、復元し活用しようか、仁徳天皇の高津宮はどう調査し、どのようにし、どう活用しようかというように、いろいろ出た意見をふまえて、そういうものを地に即して個々に検討していけばよいわけです。

いずれにしても、大阪では大阪の歴史や史跡・遺跡を大事にして、地域、地域で生かしていただければ一層すばらしい大阪が生まれると思います。意見の具申にあたっては市長や町長を恐れずに発言していただきたいものです。横並びに顔を見合う必要は毛頭ないと思います。ですから、大いに思うところを話していただきたいというのが、私の希望です。市町村長がだめでしたら私を呼んでください。喜んで飛んで行って、市町村長に面談します。こんないい話があるのだからと伝えたいと思います。私はそういうことを常日ごろ言っている人間ですから大いに使ってください。皆様も大いに案をつくり、歴史あふれる、しっとりした活気ある大都市、大阪を開拓してください。本日は長いお話ご清聴くださりありがとうございました。厚くお礼申し上げます。